

国際理解教育の事例紹介

手嶋 将博

(文教大学教育学部准教授)

平成21年度 青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア
 現職教員特別研修

国際理解教育事例

～ヒト・モノ・コトを通じた国際理解～

手嶋 将博
 (文教大学教育学部)

国際理解の3つのパターン

- ヒト(人)を通じた国際理解…留学生や地域の外国人等との交流などを通して
- モノ(物)を通じた国際理解…日用品や道具などの「五感」を通して触れるモノを通して
- コト(事柄)を通じた国際理解…祭祀や習慣、行事、行動に伴う考え方等の「文化的な異同」を通して

国際理解教育実践における課題

- ヒト(人)を通じた国際理解…一緒に何をしたらいいのかわからない(表面的・形式的になりがち)。
- モノ(物)／コト(事柄)を通じた国際理解…文化や習慣の「違い」の強調のみになりがち。「つながり」の実感が乏しいまま、そのとき限りのイベントで終了しやすい。
- いずれにしても、継続性や学びの深まりに欠け、手間の割に成果が見えない場合が多い。

国際理解教育の実践における留意点

- * 「国際理解」の究極の目的＝「共生」
- * 基本は「人間理解」→学校で普段から行われていること(自分を大切にする、お互いを尊重し、認め合う)の延長線上にある
- * 新しい価値を基盤にした生活環境(＝「公平」な生活環境)の意識の涵養
 といったことをねらいにした「継続的」で「学びあい」に繋がる実践。

実践事例:

博物館アウトリーチ教材の開発

～マレーシアでの実践を通して～

木村 慶太	立命館守山中学校
山田 幸生	鎌田小学校
中島 大輔	鎌田小学校
手嶋 将博	文教大学
クマラグル ラマヤ	マレーシア工科大学
今田 晃一	文教大学

これまでの実践の流れ

2003年 博学連携について学習指導要領に明記

国立民族学博物館と連携した国際理解教育

年度	香芝西中学校	鎌田小学校
2005	ミニ博物館づくり	ミニ博物館づくり
2006	ミニ博物館づくり 日本版みんぱくの製作	ミニ博物館づくり
2007	マレーシアへの送付と実践 マルチメディア解説	日本版みんぱくの製作
2008		マレーシアへの送付と実践

レインツリー 雨の木



レインツリーは、文字通り雨の音がする楽器です。枯れたサボテンの幹とトゲと砂漠の小石を用い作られます。小石がゆっくり落ち、トゲにあたる音が、雨の音に聞こえるのです。カトカマ砂漠では現在も雨乞いの儀式的道具として使われています。

<感想>

初めてレインツリーを見たとき、ただの木の棒だと思ったけど、音を聞いてすごい綺麗だと思った。調べてみて、サボテンから出来ている、という事にまた驚きました。これだけ、雨の音に似ているのだから、雨乞いにも効果がありそうだと思います。皆さんも、是非レインツリーを傾けてみてください。綺麗な音に、感動すること間違い無いです!!!

<引用・参考アドレス>

<http://benjimu.blog72.fc2.com/blog-entry-434.html>

<http://www.african.jp/tinga/tinga/ehop/ethnic.html>

<http://ww6.tiki.ne.jp/~milky/gakki/rainstick.html>

本実践研究の目的

- 「日本文化」の再発見
- 異なる文化を持つ他者への日本文化の発信
- マレーシアへの送付及び現地での評価を通して両国の「日本文化」に対する認識の違いを比較検証する
- 本実践を通じた中での両国の児童・生徒の意識変容に関して考察を行う

本実践研究のプロセス

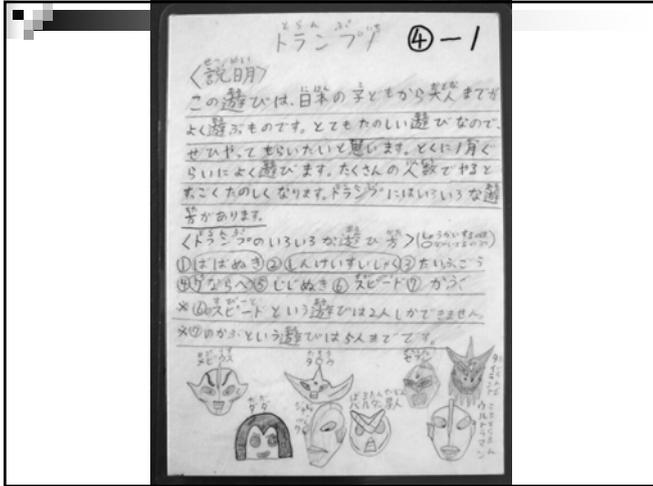
- 民博を訪問後、民族学的資料及び解説ラベルを調査
- 「みんぱく」を活用した授業の展開
- 「日本文化」を紹介するアウトリーチ教材の生徒自身による選定
- 日本の中学生による「日本版みんぱく」の作成
- マレーシアへ送付。現地の中学生に「日本版みんぱく」の評価をしてもらう。
(タマン・デサ・スクダイ国民中学校)





＜児童が選んだ資料＞

学校で使用するモノ	ランドセル、文房具類、絵の具 習字道具
生活に使用するモノ	扇子、うちわ、はし、花の便箋、風鈴
遊びに使用するモノ	こま、べったん、めんこ、万華鏡、折り紙、 千代紙、なわとび、連だこ、だるま落とし、 けん玉、ゲイラカイト、とび出す絵本、ト ランプ、ペーゴマ、野球道具、福笑い、 かるた
その他のモノ	千羽鶴





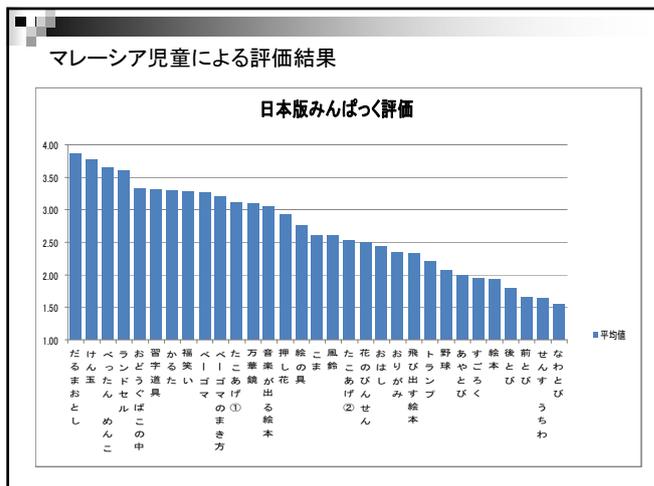
実践の結果

- 「マレーシアで、自分たちが作った教材が実際に使用される」という学習状況の設定が児童の主体的な学びを導く。
- 身近な中学生が作成した「みんなぱく」がより良い見本となり、小学生の学びに刺激を与えた。
- 小学生の資料選定の基準は「生活や遊びに根ざしたもの」が中心であった。
- 中学生版を使ったときのマレーシアの子どもたちの反応では、「日本文化を感じさせるモノ」は、「季節」に関するモノや、日本のマンガ、アニメから得た情報に関するモノであった。

今後の展開

- マレーシア留学生らの協力を得て、解説ラベルをマレー語に翻訳中。
- 今年8月に、小学生版日本文化を紹介するアウトリーチ教材をマレーシアの小学校において実践する。
- マレーシアの小学生から得た評価をもとに、さらにBRUSH UPした、アウトリーチ教材を製作することで児童の学びをより深めていく。
- 来年度以降、マレーシアの小学生が製作したマレーシア版アウトリーチ教材(マレー版みんなぱく)を日本で実践し、交流していく。





実践のまとめ(1)

- 野球道具等(マレーシアでは行われないスポーツ用具)・・・非常に関心が強いが、「日本文化」であるという意識は低い。
- ランドセルや剣玉, だるま落とし, 道具箱等(初めて見る道具・遊び)・・・いずれも関心が相対的に強い。より長時間触れ, 遊ぼうとしていた。
- 独楽, 凧, 箸, 扇子, 風鈴等(日本にもマレーシアにも存在するもの)・・・形状や使い方(遊び方)の「違い」が分かると関心が高くなる(異文化の認知・理解による関心度の上昇)。

実践のまとめ(2)

- 押し花や花の便箋等(小物・ステーションナリー)・・・女子児童が高評価。見た目や触感の「繊細さ」に日本文化を強く感じる傾向がある。
- 児童が日本に紹介したいマレーシアの遊び・・・“チョンカ”(伝統的ボードゲーム)や, “マレー凧(ワウ)”, セパタクローなど多数が挙げられた。
- 一方, サッカー, TV・パソコンでのゲームなどもあり, 日本の児童との共通項も多く見られた(グローバルゼーションの影響?)。

実践による日本の児童・生徒の変化

- 「自作アウトリーチ教材を外国で使ってもらおう」という学習目標により、児童・生徒に「自分たちが日本の代表として自国の文化を紹介するのだ」という自覚と意欲を喚起させた。
- 双方の児童・生徒にとって、異文化についての学びを通して自分自身の意識を知り、自文化に“見つめ直し(再考察)”や、なぜそのような意識が形成されたのか、という考察を深めた。
- 自作アウトリーチ教材が実際にマレーシアで活用される映像・写真を見ることで、児童・生徒は達成感と一層の興味・関心を得た。→学習の継続／発展

実践によるマレーシア側の評価

マレーシアにおいてもこの実践によって、日本の同世代の子どもたちの日常を知るだけでなく、自国の子どもたちの「日本文化」に対して抱いている意識を知ることが可能となる取り組みである、と(現地の教員にも)大変好評であった。→「マレーシア版みんぱっく」を作りたい、というマレーシアの小学生の意欲を喚起した。

実践後の児童の学習の発展

- マレーシアから得た小学生版「日本版みんぱっく」に対する評価をもとに、鎌田小学校の児童たち(5年生に進級)は、現担任の中島大輔教諭のもとで、ブラッシュアップしたアウトリーチ教材を製作するために、以下の3つの視点—①木材で出来たもの、②日本の技術を感じられるもの、③冬を感じさせるもの—を自ら考え出した。
- さらにその過程で、今まで自分たちが使っていた「木のおもちゃ」の原材料の木材が、実はマレーシアなどの海外から大量に輸入されていたことに気づき、地球環境に関する関心も深まるなど、児童の「学び」をより深める結果となった。



今後の展開

- 本研究の結果、マレーシアの子どもたちは「遊び」を通して日本の文化を知り、日本の子どもたちはアウトリーチ教材の製作を通して、異文化である「世界」を意識する一方、自文化としての「日本」への見つけなおしが行われた。
- 今回の成果を生かして、来年度以降、マレーシアの小学生が製作したマレーシア版アウトリーチ教材「マレー版みんぱっく」を用いた実践研究を日本で実践して、教材の内容や、児童による評価結果を比較していく予定である。